

「また浄土へいそぎまいりたきころのなくて、いささか所勞のこともあれば、死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。久遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだうまれざる安養の浄土はこいしからずそうろうこと、まことに、よくよく煩惱の興盛にそうろうにこそ。なごりおしくおもえども、娑婆の縁つきて、ちからなくしておわるときに、かの土へはまいるべきなり。いそぎまいりたきころなきものを、ことにあわれみたまうなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じそうらえ。踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へもまいりたくそうらわんには、煩惱のなきやらんと、あやしくそうらいなまし」と云々

第4組 生振寺住職

第9章「愚禿」

白山 敏秀

text by Toshihide Shirayama

「また浄土へいそぎまいりたきころのなくて〜。」（我々には浄土を願う心が無い。菩提心が無い）と言われる。仏道を歩まんとする者にとって、これほどショックな言葉があろうか。我々の考え方、頭の中がまるごと否定されているのだ。我々はわが思いを叶えることこそ人生（罪福信）という永遠に閉ざされた世界を、煩惱という執着のエネルギーをもって遂げんとする、なんとも救われようのない時を漂流してきた。歎異抄9章後半に語られる言葉には凡夫のこの世界の絶望的頼りなさを感じるけれど、語る親会聖人は、不思議にも定まった道の上に安立して生きいきと輝いている。それは、出遇いによって自分の思いの中に浄土への道の可能性皆無と決定し得た絶望の光なのであろうか。

釈尊は自身の思いの成就による救いを断念し、菩提樹下で囚らずも、既に十劫のいにしえ、凡夫の救いを成就した南無阿弥陀仏のいのちとの出遇いを果たされる。釈尊は以後涅槃に入られるまで、この世遇いによって生きることを決め、弟子たちにもそれを勧め、一代の間このいのちとの出遇いから流れ出す教えを説き続けたが、そのいのちそのものを説明することは一切できなかったという。

今、そのいのちとの出遇いそのものが、出遇いし者の自覚の名となった。「愚

禿積親鸞」。積は積尊。親は天親菩薩、鸞は曇鸞。積尊七高僧等、この出遇いしいのちを讃嘆し、その出遇いを勧めて止まない諸仏たちの願いを我が名とした聖人。1人では生きられない人間の本体がこの願いたちであるなら、この願い（念仏を称えよ）に応えることこそ人間の生なのであろう。

それならば、この「愚禿」とは何であろうか。愚かで何の役にも立たぬ者。法然上人の「愚痴の法然房」という名のりにも、最澄の願文の一節、

愚が中の極愚。狂が中の極狂。塵禿の有情。底下の最澄。

にも見えるように、それは決して謙遜でも自らに教えて領かんとした言葉でもない。仏のいのちそのものに出遇えた瞬間に、いのちが私となった。主体の誕生の自覚の名のりそのものであった。それ故に言葉の意味とかけ離れて、なんとも力強くその人の生を輝かすのである。

かのスティーブ・ジョブズ氏（アップル創業者）がスタンフォード大学の卒業式で卒業生に迷った言葉を思い出す。「常にハングリィであれ。常に愚かであれ。」これを聞いて思った。これは積尊の遺言ではないかと。積尊は菩提樹下の南無阿弥陀仏のいのちとの出遇いに生き、弟子たちに勧め、そして未来の衆生にも遺言をもってこの出遇いを勧めた。

自灯明。法灯明。

これこそ「常に愚かであれ」という出遇いし愚禿の名のりであろう。

では比丘たちよ、わたしはなんじらに告げよう。諸行は壊法である。不放逸にて精進するがよい。これがわたしの最後の言葉である。

増谷文雄「仏陀」より

娑婆の全てが何にもならない人生と決してなお、そこに輝いて生きんとするいのちに出遇いなさい。それはジョブズ氏の言う「常にハングリィであれ」ということではないか。彼は仏教徒であったという。

愚禿の名のりこそ南無阿弥陀仏の名のり。往生人の誕生。阿弥陀の、「生まれんと欲え」との呼び声に応じて人生が欲生心となった者の名。そして全人類の名のりである。人間の本来の名なのである。そこにこそ真の道が決定して輝いている。故に聖人は「踊躍歓喜のこころもあり、いそぎ浄土へもまいりたくそうらわんには、煩惱のなきやらんと、あやしくそうらいなまし」と言葉を継いで南無阿弥陀仏との出遇いの愚禿の自覚を味わっているのである。